



企業編



パスカル大分株式会社

安岐町下原200番地
開設 ▶ 平成3年10月 従業員 ▶ 180名

パスカル株式会社の社名は、流体圧力の基本原則「パスカルの原理」を発見

した17世紀のフランスの哲学者ブレイズ・パスカルからきています。昭和50年、パスカルの原理を利用した小型で効率的な油圧ポンプを開発し、パスカルポンプと名付けました。その油圧ポンプを活かしてプレス機械の金型クランプ(金型をプレス機械に固定する油圧機器)を製造。中でも金型の位置まで自動的に移動して金型を固定できるトラベリングクランプは、プレス加工ラインのスタイルを一変させ、世界中の自動車工場で使用されています。業績が順調に伸び、工場が手狭になって、新たな工場用地を探し



▲パスカルポンプの組立

ていた時、空港に近い立地条件と熱心な誘致により、平成3年、安岐町に工場を開設することになりました。その後も、工作機械で精密部品を作るのに必要な高精度のワーククランプやプラスチック部品を製造する射出成形機の金型を磁石の力で機械に固定する画期的なマグネットクランプ等を開発。製品の種類が増える度に工場を増設した結果、開設当初2万4千㎡であった工場用地も、4万9千㎡まで拡大しました。今では、大分工場は、パスカルグループが製造する製品の7割を占める主力工場となっています。また、自動車産業に関わる当社としては少しでもCO2の削減の一助となればと思いい、工場の緑化にも力を入れ、緑が工場を包み込む「森の工場」を目指してきました。その取り組みが認められ、開設して4年後の平成7年に緑化優良工場として、日本緑化センター会長賞を受賞しました。そして、開設から25周年の今年、九州管内の緑化優良工場で最高賞にあたる九州経済産業局長賞を受賞しました。

パスカルは、世界初、自社だけにしかない製品を数々生み出してきました。これからの社員全員が柔軟な考えで、失敗を恐れずどんどん挑戦していき、世界に認められる製品作りを取り組んでいきます。



▲部品の加工



▲平成27年8月に建設した第6工場



▲加工部品の検査



▲トラベリングクランプの組立

第一次産業編



農事組合法人よしき

国東町北江
平成18年8月から集落営農に
取り組む

国東町の吉木地区は、大規模農家が少なく兼業農家が多い地域でしたが、中

山間直接支払制度等を利用して、地域全体で農村環境整備に取り組んできました。しかし、後継者不足もあり、休耕田が目立つようになり、そこで、農地を有効活用し、生産性の向上を図るため、平成17年11月に「吉木麦・大豆生産組合」を設立しました。そして、乗用管理機等を導入し麦・大豆の作業委託を行うようになりました。しかし、いざ生産組合で活動してみると、農地の貸し借りや買い取り、農機具等の購入資金の調達方法などが、法人の方が有利であることが分かりました。そこで、生



産組合の役員が中心となり、アンケート調査や集落座談会、先進地視察を行いました。協議を重ねた結果、「①安心して農業が続けられる。②集落の水田を守り農地を高度利用する。③今より楽で、利益の上がる農業の実現」という方針を立て、平成18年8月に「農事組合法人よしき」を設立しました。設立方針を守るため、荒廃田や耕作放棄地の防止や機械設備の充実、農地の有効活用に取り組みしました。そうした取り組みの結果、地域内のほとんどの休耕田を法人で管理するようになり、法人管理の耕作面積は、約26ヘクタールまで拡大しました。農地を有効活用した結果、地元の方が法人の農作業に出てもらった際に時給1,000円以上の賃金、小作料は1反あたり1万円を支払うことができている。しかし、設立から10年が経ち、これまで主に作業をしてきた組合員の高齢化が進んでおり、若い世代の組合員の参加が必要になっているのが現状です。また、作業する組合員の多くが自分の農地でも耕作をしており、法人での作業と時季が重なるため、十分な人員を確保できないという問題もあります。「農業生産法人よしき」は、地域と連携をとりながら農村環境を維持してきた経験を活かし、次の10年に向けて持続可能な組織づくりに取り組んでいきます。



商工会編



有限会社テラオカ

国見町伊美
昭和16年から畳店を営む

▲左から 寺岡勝昭さん、娘婿の剛さん、娘の美代子さん、甥の英喜さん、弟の陽一郎さん

元の国見町伊美に戻って、昭和16年に畳店を開業しました。当時の国見町内には、5、6軒ほど畳店がありましたが、畳の需要も多かったため、畳店をしながら安定した経営をしていました。その後、勝昭さんが畳店を継ぎ、弟の陽一郎さんは県外で働いていましたが、昭和47年に帰郷して内装業を始めました。そして、兄弟で今後の事業について話し合った結果、同一会社の形態でそれぞれの事業は部門として残すことにし、昭和49年に有限会社テラオカを設立し



ました。昭和50年代後半には、漁師や農家の方たちの景気が良かったこともあり、タタミ部とインテリア部の両部門とも好調でした。しかし、そこから徐々に景気が後退していき、仕事も減っていきました。さらに、畳が家屋に使われなくなり、2000年頃には国見町内で畳を取り扱う唯一の会社になっていました。そのような中でも、娘の美代子さんは後を継ぐための修業を積みました。その後、縁があつて、福岡の畳店で働いていた剛さんと知り合い、夫婦で後を継ぎました。一方、インテリア部は、陽一郎さんの息子の英喜さんが、父の後を継ぐために一度県外で修業した後、18年前に戻り父と一緒に働くようになりました。

剛さんは、「畳の良さは、触れば必ず感じてもらえる」と信じています。そのためにも、1つ1つの畳を丁寧に仕上げています。そして、息子が後を継ぎたいと思えるようなお店にしていきたいです。英喜さんは、「ここ2、3年は、国見町や豊後高田市、姫島村の仕事が多くなってきました。しかし、これからも続けていくためには、もっと市内の方からたくさん仕事をもらえるように努力していきます」と語っていました。

